



Profile

1964年東京都生まれ。東京大学理学部物理学科卒業。同大学博士課程修了後、同大学医学部、米国のハーバード大学などを経て、1997年より東京大学大学院総合文化研究科助教授。2012年4月より現職。言語処理の法則性を脳科学として実証する研究に取り組む。

●自著を語る●

●BOOK

『脳を創る読書 なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』

実業之日本社 1260円
☎03-3535-4441



東京大学大学院総合文化研究科教授

酒井 邦嘉 / Kuniyoshi Sakai

電子教科書は 「考える力」を奪う

東大生に手書きレポート

私は学生にレポートを課すとき、「手書き郵送」を条件にしています。パソコンでコピーする学生が多いからです。書いては消し、書いては消しする過程で「考える」時間を持ってもらいたいのです。

それでも先輩のレポートをコピーしてくる学生はいるかもしれませんが、少なくとも手書きで写している間は良心の呵責に耐えねばならないわけです。電子化により効率優先主義が加速しているので、学生は勉強においても効率よく早く答えを出さねばならないと追い込まれているように見えます。

人が書いたものをネットで検索し、また自分のもののようにコピーするのが当たり前になっています。考えなくなるのと同時に、盗用やねつ造、著作権侵害をしている意識が薄れていきます。オリジナル（原本）の大切さに気付いてほしくて郵送もさせていますが、そんな防波堤が

大学に必要な時代になってしまいました。

考えない子どもが増える？

教科書も含め書籍の電子化は避けられないでしょう。実際に使うなら子どもにどんな影響があるか、どのような使い方がよいのかを検証すべきです。

はっきりしているのは、自分で考えて書き、書いて考える時間がないと知識は自分のものにならないということです。そして勉強でも仕事でも、既存の知識の中にかかひつかりが浮かんできて、それを広げていくところに新しい発見が潜んでいるのです。

効率よく答えが出るばかりの環境になったら子どもは考えなくなります。無自覚に電子化の波に流されると、はっと気付いたときには「考える力」を失った子どもを前に、教師が頭を抱える状況が生まれているかもしれません。

「借り物ではなく、自分の頭で考えねば世の中は渡っていか

ないんだ」と教育を通して伝えることが大人の役割だと思えます。

参考書は薄い方がいい

でも、電子辞書は便利じゃないかと思われるかもしれませんが、実はそう思っているのは大人だけではないでしょうか。門前の小僧習わぬ経を読むは、同じお経が繰り返されるから記憶に残るのです。毎日別のお経だったら覚えられません。インプットはなるべく少なくして繰り返しに徹する方が定着がよいのです。情報量を無限大にして、いつでも検索できるようにしてしまつたら記憶する必要なんてないし、どこに何があつたかという手掛かりを思い出す力さえ失われてしまつてしまいます。

辞書や参考書は薄くてもいいですから、書き込みやマーカーをさせまじょう。一冊まるごと自分のものになれば、ネットで検索するよりもずっと素早く「考える」道筋にたどり着けるはずです。